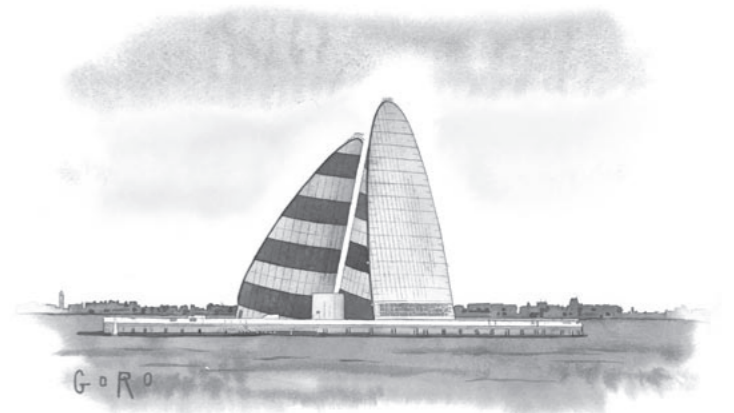


潜水士 — 渋谷正信 [前編]

今回紹介する職人は、「潜水士」。
「基礎」「型枠」「鉄筋」「コンクリート打設」…
通常の工事ではそれぞれ専門の業者が行う
これらの工程を、水中で一手に引き受ける。
そんな海洋工事のスペシャリストにして、
潜水士の常識をも変えてきた草分け的存在・
渋谷正信に、この職業に就いたきっかけと
潜水作業の歴史について語ってもらった。



還暦を過ぎ、経営者となった今も日本全国の海の現場を飛び回り、天候や海の荒れ具合、海中の状況を見て作業の可否を判断するなど、最前線で潜り続ける。(写真：坂中雄紀)



東京湾アクアライン 風の塔

泳げなかった「潜水士」

潜水作業の第一人者として数々のダイバーの尊敬を集め、テレビ番組でも何度かその活躍ぶりが取り上げられている潜水士・渋谷正信。その彼が「泳ぎが得意ではなかった」と聞けば、意外というほかない。しかし生まれ育った環境からすれば、無理もないことだった。

「北海道は釧路で生まれたんですけど、あそこは夏の日照時間が日本でも一番少ない土地。夏が暑くないから、学校にプールはないし、水泳の時間もない。でも、どういうわけか小さいころから水への憧れがあったんですね」

小学生時代、禁止されている近所の川での遊泳がバレて、全校生徒の前で大目玉を食らったこともあるという。しかしそれくらいでは「泳ぎ」への衝動は抑えられなかった。職業訓練校を卒業して東京のメーカーに就職すると、勤務先の工場に社員用のプールがあった。それまで川でしか泳いだことがなかった渋谷はいても立ってもいられず、実業団の水泳部に入学した。「最初の一年、ほとんど溺れてましたね(笑)。部長も驚いたと思いますよ、何せ泳ぎを習ったこともない、川で二〇分くらい犬かきしてただけのやつが水泳部に入ってきたわけだから」

「とにかく、そのころの泳ぎはてんでダメだった。でも泳ぐのが好きだったから、二年三年とやっけていくうちに上達して、クラブの人たちと一緒に泳げるようになったんです」

そして、その後の渋谷の人生を一変させるできごとが起きる。

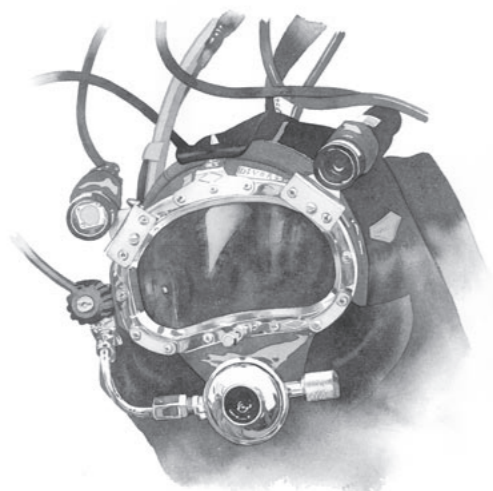
上司・両親の猛反対を押し切って

「クラブの先輩の実家が三浦半島で漁師をしていて、そこに遊びに行っただけです。そこでマスクを借りて潜って、初めて海の中の世界を目の当たりにして…もう一瞬で虜になりましたね」

さっそく道具をそろえて、毎週のように海に出かけ、素潜りで魚を捕ることに夢中になった。



しぶや・まさのぶ◎1949(昭和24)年、北海道生まれ。幼少時より泳ぐことへの憧れが強く、最初の就職先で会社の水泳部に入部。さらに高じて潜水士の資格を取得、海洋土木・建築現場の作業潜水士となる。携わった事業は「横浜ベイブリッジ」「東京湾アクアライン」など多数。現在は渋谷潜水工業・社長、またダイバー養成校「水中塾」塾長も勤める。



フーカー式潜水具

日本職人紀行

「時代に合わせて 潜水スタイルは変わっても、 ダイバーとしての心構えは 変わらない、変えちゃいけない」

コンビでやっていた時代より、ある意味個人プレーのような側面が強くなってきましたね」
つまり、日本の海洋土木のコンクリート構造から鋼構造への変遷が、潜水士の気質にも影響を与えたのだという。
「当然、ヘルメット式を身につけようという若い人も減りますよ。ただ、潜水のスタイルが変わるのはいいとしても、潜っている親方をみ

んなで連携してサポートするとか、道具を大事にするとか、そういうヘルメット式のいいところは残していくべきだと思っんです。潜水法が手軽になったからといって、ダイバーとしての心構えまで省略しちゃいかんぞ、と」
凄腕潜水士らしからぬ気さくな話しぶりながら、どここの分野でも「簡単・便利」がもてはやされる風潮に釘を差すことも忘れなかった。



右/海中での溶接作業。陸上よりはるかに不安定な体勢、しかも通電をとまなうため、高度な技術と経験が不可欠。
左/東京湾アクアラインの換気施設「風の塔」の建設現場をバックに。このころから、作業潜水士の工事は複雑化の一途をたどった。

潜水作業史 ヘルメット式からフーカー式へ

四方を海に囲まれたわが国だけあって、潜水作業の歴史は古い。潜水器具を用いない、いわゆる「素潜り」での作業は、記録には残っていないものの、おそらく江戸時代にはすでに埋立工事などで行われていたと推測される。
陸上からパイプを通してポンプで空気を送って長時間水中作業を行う「ヘルメット式」が使われ始めたのは明治時代。以降、昭和後期あたりまではこの方式が潜水作業の主流だった。

「ヘルメット式は、丁稚から始めて長い下積みがあつて、親方の仕事を陸の上からずっと見つけて、ようやく仕事を覚えて一人前になれるっていう、よくも悪くも職人氣質の世界。装備は何十キロもあるし準備も時間がかかる。以前は潜水作業といえば港湾建設で、海底を地ならししてその上にコンクリート構造物を築くような工事がほとんどだったからそれでもよかつたんですけど、昭和の終わりくらいから水中の工事内容がだんだん複雑になってきたんです」
海底の地ならしにとどまらず、鋼材の溶接・切断、鋼管矢板の打設やモルタル注入など、潜水士に求められる作業は、より高度で正確さを要するものへと変化していった。
「まあ、日本に港がどんだけあったんですね。世界中見ても、日本くらいありとあらゆる入り江に港があるような国はないですよ。それで、ベイブリッジとかアクアライン、羽田のD滑走路なんかもそうですけど、鋼材を使う海の現場が増えてきた。そうになると、重装備で送気管の取り回しも大変なヘルメット式より、身軽で動きの制限が少ないフーカー式の方がずっと作業しやすいということになる。今は八割以上がフーカー式です。でもフーカー式は、技術は短時間で学べるし、準備も自分一人で行えるから結果としてヘルメット式のような親方と弟子の

※フーカー式は、地上から空気を送る点では同じだが、マスクとレギュレータ(圧力調整器)のみと軽装のため、安全性・機動性ではヘルメット式よりすぐれている。